

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02158

研究課題名（和文）ベルクソン哲学における様相概念の総合的研究

研究課題名（英文）Bergson's Modal Metaphysics

研究代表者

村山 達也（Murayama, Tatsuya）

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：50596161

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：ベルクソンの用いる様相概念をさまざまな観点から検討した。大きな成果は三つある。第一に、ドゥルーズによるベルクソン解釈以来、潜在性概念が極めて重要であることが自明視されてきたが、これに対して、ベルクソンの哲学で潜在性概念はほとんど役割を果たしていないことを明らかにした。第二に、ベルクソンによる可能性批判の議論を再構成し、その眼目や隠れた前提を明らかにした。第三に、ベルクソンによるイメージ概念の正当化を再構成し、そこで「概念化できないことは形而上学的にも不可能である」という近世以来の原理が用いられていることを明らかにした。なお、以上はどれもハンドブックや査読誌において英語で公表されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

必然性、可能性、潜在性といった様相概念は、哲学史上さまざまなものが提案されてきた。ベルクソンにおける様相概念はそのなかでも伝統を引き継ぎつつ特異なものであり、その検討はベルクソンの哲学のみならず近世哲学史の再検討に繋がる重要性をもつ。また、そうした様相概念は、哲学の中で流通するだけでなく、私たちの普段の考えにも影響を及ぼす。とりわけベルクソンの潜在性概念や可能性概念は、ドゥルーズの解釈を通じて、私たちが創造性というものを考える上で影響力をもっている。そうした背景の下、あらためてベルクソンの原典に立ち戻って様相概念を検討することは、創造性をめぐる私たちの考えの吟味という意味でも大きな意味をもつ。

研究成果の概要（英文）：The concept of modality as employed by Bergson is analyzed from various perspectives, yielding three significant findings. Firstly, it has been demonstrated that the notion of virtuality holds minimal significance within Bergson's philosophy, contrasting sharply with the importance attributed to it in Deleuze's interpretation of Bergson. Secondly, Bergson's critique of possibility was reconstructed, revealing its underlying assumptions and implicit premises. Thirdly, Bergson's justification for the concept of image was examined, showing that he relies on the traditional principle that if it is inconceivable that P, it is impossible that P, a principle which has its roots in early modern philosophy. It should be noted that these findings have been published in English in a handbook and a peer-reviewed journal.

研究分野：哲学

キーワード：ベルクソン 様相 潜在性 可能性

## 1. 研究開始当初の背景

研究の背景としては二つの動向を挙げるができる。

第一に、必然性や可能性といった様相を扱う論理学の発展と、併せて興隆した、様相概念の哲学史的研究がある。現代論理学は、様相についての私たちの理解を格段に明確化し、西洋哲学史上の様相概念の研究も大きく進展させた。今日では、アリストテレス、デカルト、スピノザ、ライプニッツ、カントといった過去の西洋哲学者たちの様相概念が、現代論理学を用いて盛んに研究されている。だが、デカルト以降で様相について最も多く考察したフランス哲学者であるベルクソンについては、現代論理学を踏まえた研究はほぼ存在しない。これは様相の研究にとって大きな損失である。

もちろん、だからといって、現代論理学の道具立てをそのままベルクソン解釈に用いることには慎重でなくてはならない。というのも、一つには、哲学史研究には「テキスト(というデータ)から言える範囲のことを言う」というルールがあるが、ベルクソンの場合、様相について直接に論じたテキストがそれほどたくさんあるわけではないからである。それゆえ、科学哲学で「過小決定」と呼ばれることが頻繁に生じる。すなわち、いろいろな仮説が可能であるが、そもそものデータが少ないため、「この仮説よりもあの仮説のほうがよい」というように絞り込むのが極めて困難なのである。またもう一つには、一般的なこととして、どちらも一定の構造を備えた二つの思想/表現システムについて、一方の言葉で他方の言葉を表示しようとするとき、翻訳された側の内容を歪めないのはとても難しいということがある。極端かつ仮想的な例で言えば、論語からいくつかの断片を取り出してスコラ哲学の枠組みで解釈したりとか、より身近な例で言えば、自然言語を記号論理の式に翻訳したりするときのことを考えれば、そのことは明らかである。ベルクソンの主張や議論を、現代論理学の言葉で表すときにも、おそらく同じことが生じる。ベルクソン哲学と、現代論理学(とりわけ様相論理学)とは、基本的な存在論や問題意識などが異なるため、安易な応用は容易に歪曲に繋がるのである。それゆえ、まずはベルクソンのテキストに忠実に、そこから、様相についての主張なり、概念ネットワークなり、論証なりを取り出し、丁寧に明確化する必要がある。その上で、可能なようであれば、ないし、必要そうであれば、現代の道具を用いてそれらを形式化するなどの本格的なアプリケーションを試みるのがよいのである。先述のアリストテレスやライプニッツなどの場合、明確化の蓄積が膨大にあり、それを踏まえて形式化がなされている。そしてベルクソンの場合、そうした蓄積がないため、まずは明確化を丁寧に行なっていく必要があるのである。以上が第一の動向である。

第二の動向として、より限定的な、ベルクソン研究内部に関わるものもある。ドゥルーズの解釈から半世紀を経てなお、それに代わる新しいベルクソン像は模索中である。ここで、二〇世紀の英語圏で発展した分析哲学を踏まえた、議論の再構成を積極的に行なうタイプの読み直しは、研究の刷新に極めて有効であり、広く哲学史研究という意味では、古代哲学研究であれ近世哲学研究であれ近代哲学研究であれ、国際的な潮流となつて久しい。だが、広く分析哲学を踏まえたベルクソン研究は、残念ながらほぼ存在しない。近年の英語圏の研究の多くは現象学やドゥルーズに基づく。古い研究なら多少は存在するが、ベルクソンに極度に冷淡であったり、考察が部分的であったりといった欠点をもつ。

つまり、議論の再構成に主眼を置く哲学史研究という点でも、ましてや、様相概念の哲学史的研究という点でも、ベルクソン研究は大きく遅れており、そのためもあって、半世紀前の解釈の桎梏を離れて新しいベルクソン像を提示することがいままなおできていないのである。

この状況には、ベルクソン哲学における様相概念の総合的研究が大きな突破口たりうると思われた。それは第一には、ドゥルーズの支配的解釈が、まさに「可能性」と「潜在性」という様相概念を主たる軸にしているため、別の仕方での様相概念の研究は、ドゥルーズの解釈を批判的に吟味して距離を取るための最適の手段であるからである。また、第二には、ベルクソンの主要概念の多くが様相に関わる(自由と「必然性」、創造と「可能性」など)ため、分析哲学的研究の蓄積が豊富な様相概念は、分析哲学の観点からベルクソン哲学全体を読み直す格好の切り口となりうるからである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、様相(必然性・可能性・現実性など)についてのベルクソンの考察をさまざまな側面から把握し、その哲学的意義を示すことである。これまでベルクソンの様相概念は「潜在性」のみが注目されてきた。だが彼は、他の様相についても独自の考察を残しており、その研究は、様相についての私たちの理解を深める点で有意義である。また、上述の通り、議論の再構成に主眼を置く哲学史研究という国際的に活発な潮流をベルクソンに及ぼし、新しいベルクソン像を描くうえで、この研究はきわめて有効である。

### 3. 研究の方法

ベルクソンのテキストの丁寧な読解と、現代哲学の蓄積を踏まえたその解釈、とりわけ議論の再構成が、主たる方法である。様相概念には以下の順番で取り組む。

まずは、ベルクソンが明示的に論じている唯一の様相である「可能性」を分析する。なお、その際、「潜在性」についてもあわせて（あるいは前もって予備的に）分析する。上述のドゥルーズが、ベルクソンは可能性を批判して潜在性を称揚した、というように、可能性概念と潜在性概念とを密接に組み合わせた解釈を提示しているため、その解釈を検討する上でも、この二つの様相は併せて検討する必要があるからである。そして、その分析を踏まえて、ベルクソンが自由やイマージュといった他の概念を論じる際に用いている（不）可能性概念、ないし必然性概念を分析する。具体的には、定義不可能性、思考不可能性、形而上学的必然性などである。

### 4. 研究成果

さまざまな成果を上げることができたが、特に大きな成果としては三つが挙げられる。

第一に、潜在性概念の検討である。ドゥルーズによるベルクソン解釈以来、ベルクソン哲学において潜在性概念が極めて重要であることは自明視されてきたが、テキストに即した検討はほとんどなされてこなかった。それに対して本研究は、あらためてテキストに立ち戻り、ドゥルーズがとりわけ重視する『物質と記憶』を中心に精査して、ベルクソン哲学において潜在性概念は特に重要な役割を果たしていないこと、さらに言えば、潜在性概念にあえて注目することはベルクソンのいくつかの側面から私たちの目を逸らさせ、結果としてベルクソン解釈を歪める危険さえあることを明らかにした。要点をまとめて言えば、ベルクソンは「潜在的（に）」というのを「可能であるがまだ実現していない」という意味で、要するに、哲学辞典を引けば載っているような意味で用いており、また、「潜在性」という概念は、物質や記憶の存在証明という『物質と記憶』の主たる目的にとって何の役割も果たしておらず、そのため、「潜在性」への注目はこうした存在証明の等閑視に繋がりがかねないということである。この成果は、共著の一章として、「潜在性とその虚像：ベルクソン『物質と記憶』における潜在性概念」というタイトルの日本語論文として発表した後、内容を改訂、圧縮して、Routledge より出版された共著のコンパニオン Mark Sinclair and Yaron Wolf (eds.), *The Bergsonian Mind* の一章として、“Bergson on Virtuality and Possibility” というタイトルの英語論文の一部に組み込んだ。

第二の成果として、ベルクソンによる可能性批判の議論を再構成し、その眼目や隠れた前提を明らかにしたことがある。最後の著作『思考と動くもの』所収の論文「可能的なものと現実的なもの」において、ベルクソンは、可能性という概念そのものを、この宇宙で現に生じている創造を見えなくさせるものとして批判している。新しく現れたものも、あらかじめ可能性としては存在していたのだ、とされてしまうことで、その真の創造性が隠されてしまう、というのである。この批判はドゥルーズのみならずジャンケレヴィッチも注目していたことで、ベルクソン研究においてはかねてより有名なものであったが、これまでは、その結論がそのまま受容、ないし反復されるだけで、その批判がどのように正当化されているのかということは、ほとんど検討されてこなかった。そこで本研究は、可能性概念の批判が、ベルクソン最初の著作『意識の直接与件についての試論』から最後の著作『思考と動くもの』に至るまでにどのように形成されていったのか、その過程を詳細に辿ったうえで、論文「可能的なものと現実的なもの」でなされている批判の再構成を行なった。そこでは、『直接与件』以来の自由論のみならず、「存在するものはすべて知覚可能である」という『道徳と宗教の二源泉』でも用いられている前提など、ベルクソン哲学におけるさまざまな考えや原理が動員されていることが明らかになった。これは、上述した英語論文“Bergson on Virtuality and Possibility”の後半として出版されている。

第三の成果として、以上の検討を踏まえて、本研究は、ベルクソンが自由や物質、無の問題など、他のさまざまな主題を論じる際に登場する様相概念も検討した。具体的には、自由の定義不可能性、物質をめぐる議論で登場する、思考不可能性と形而上学的不可能性とを繋ぐ原理などである。自由の定義不可能性については英語で複数回の学会発表を行ない、少しずつ研究を進展させているが、研究期間内での論文公表には至らなかった。ただし一定の成果は収めつつあり、今後も研究を継続して公表する予定である。

思考不可能性と形而上学的不可能性については二つの論文に繋がった。そのうち一つは、『物質と記憶』第一章における「物質はイマージュの総体である」という主張を正当化するベルクソンの議論の再構成の一部をなしている。すなわち、その正当化のある箇所でのベルクソンの議論は、「物質がそれ自体で感覚質をもっていない状態は思考できない」ということから、「物質は必然的にそれ自体で感覚質をもつ」ということを導き出していると解釈することができる（というよりは、そう解釈しないとその箇所は理解できない）。そしてここには、「Pということが思考不可能であるならば、Pということは不可能である」という原理が働いているのである（物質がそれ自体で感覚質をもっていない状態が思考できないなら、その状態は不可能である、言い換えれ

ば、その状態の否定にあたる状態 すなわち、物質がそれ自体で感覚質をもつという状態が必然的に成り立つ)。これは、ベルクソンがそうした原理を用いているという指摘にとどまらない哲学史的な射程をもつ。すなわち、一般に「思考不可能性原理(Inconceivability Principle)と呼ばれるこの原理は、実は、合理主義者か経験主義者かを問わず、十七世紀の哲学者たち デカルト、ライプニッツ、バークリ、ヒュームなどが広く用いていたものなのである。こうしてベルクソンの哲学が、革新的であると同時に、伝統にも深く根差していることを明らかにすることができた。この成果は論文“Bergson’s Arguments for Matter as Images in *Matter and Memory*”としてまとめられ、De Gruyter から出ている査読誌 *Archiv für Geschichte der Philosophie* に掲載が決定しており、先行オンライン版(Advance Online Publication)は既に公開されている。

もう一つの論文は、「なぜ何もないのではなく、むしろ何かが存在するのか」という問いへのベルクソンの批判の再構成である。ベルクソンはこの批判を『創造的進化』第四章と、やはり先述の論文「可能的なもの現実的なもの」とで、都合二回行っており、この論文では後者での議論の再構成を行なった。ここでは、やはり先述の思考不可能性原理が、「P ということが可能であるならば、P ということは思考可能である」という対偶の形で用いられている(というよりは、ベルクソンの議論を妥当なものとして再構成するためには、そのような原理が用いられていると考えることは一つの有力な選択肢である)ことを明らかにした。しかもこれは、形而上学の問題の解決に日常言語の分析を利用するという、後年の日常言語学派を先取りしたような議論をベルクソンが行なっている、まさにその箇所でのことである。こうして本研究は、ベルクソンが思考不可能性原理にさまざまな場面でコミットしていることに加えて、ベルクソンが最も革新的であるその場面において、伝統に深く根差した原理を用いているという、極めて興味深いことを明らかにした。この成果は、雑誌 *Síntese: Revista de Filosofia* の『思考と動くもの』出版九〇周年特集号に、に、招待論文« La Critique bergsonienne de l'idée de néant et du problème : pourquoi y a-t-il de l'être plutôt que rien ? Essai de reconstruction formelle »として掲載が決定している。

他にも、研究期間内の公表には残念ながら間に合わなかったが、本研究の成果を各所に盛り込んだ共著『ワードマップ ベルクソン 諸学と協働する哲学』(新曜社)が出版予定であり、原稿は既に揃って出版社に渡っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Murayama Tatsuya	4. 巻 AOP
2. 論文標題 Bergson's Arguments for Matter as Images in Matter and Memory	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Archiv fuer Geschichte der Philosophie	6. 最初と最後の頁 1~26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/agph-2022-0127	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村山達也	4. 巻 47
2. 論文標題 反省会としてのメタ哲学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 哲学の探求	6. 最初と最後の頁 27~58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村山 達也	4. 巻 34
2. 論文標題 自足した愛の曖昧な対象	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東北哲学会年報	6. 最初と最後の頁 73~88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24521/tpstja.34.0_73	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Tatsuya Murayama
2. 発表標題 Bergsonian Freedom as Expression
3. 学会等名 PBJ Symposium 2022 In Search of Time and Free Will（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tatsuya Murayama
2. 発表標題 Bergson on the Indefinability of Freedom
3. 学会等名 Time, Freedom, and Creativity: Bergsonian Perspective (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村山達也
2. 発表標題 哲学者たちの反省会
3. 学会等名 哲学若手研究者フォーラム (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MURAYAMA, Tatsuya
2. 発表標題 Why is Bergsonian Freedom Indefinable?
3. 学会等名 Workshop for Young Researchers with Adrian W. Moore
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村山達也
2. 発表標題 自足した愛とその曖昧な対象：ベルクソンの道德論における
3. 学会等名 東北哲学会
4. 発表年 2017年

## 〔図書〕 計2件

1. 著者名 Tatsuya Murayama, Mark Sinclair, Heike Delitz, Celine Surprenant, Susanne Guerlac, Yaron Wolf, Yaron Senderowicz, Matt Barnard, Donald Landes, Camille Riquier, John O Maoilearca, Keith Ansell-Pearson, Stephen Crocker, Robert Watt, Stephane Madelrieux, Tano Posteraro, Adrian Moore, Arnaud Francois, Yuval Dolev, et alii.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 528
3. 書名 The Bergsonian Mind	

1. 著者名 村山達也、カミーユ・リキエ、藤田尚志、檜垣立哉、バリー・デイントン、清水将吾、平井靖史、永野拓也、デイヴィッド・クレプス、太田宏之、マイケル・R・ケリー、ジャン=リュック・プチ、兼本浩祐、三宅岳史、ユリア・ポドロガ、増田靖彦	4. 発行年 2017年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 381
3. 書名 ベルクソン『物質と記憶』を診断する	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

<p>本科研の枠内で行なった研究で、出版が決定し、原稿も完成しているが未刊行のものに、村山達也「芸術作品としての自由行為：ベルクソンの自由論と19世紀西欧の芸術論」（書肆心水より出版予定の『直接与件』をめぐる論文集（共著）に収録）、ならびに、Tatsuya MURAYAMA, 'La Critique bergsonienne de l'idee de neant et du probleme : pourquoi y a-t-il de l'etre plutot que rien ? Essai de reconstruction formelle' (Forthcoming in Sintese: Revista de Filosofia, 2024)などがある。</p>
---

## 6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

## 〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Workshop for Young Researchers with Adrian W. Moore	開催年 2018年～2018年
---	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------